

デカルトからフランス大使への請願書

倉 田 隆

デカルト哲学の信奉者でユトレヒト大学医学部の教授職にあったレギウス (Regius/Henry le Roy, 1598–1679) が提出したテーゼに端を発したいわゆる「ユトレヒト紛争」は、デカルト自身を巻き込む訴訟事件になった。デカルトは、自らの哲学とレギウスを擁護するために、1642年に『ディネ師宛書簡 *Epistola ad Patrem Dinet*』を、そして翌年に『ヴォエティウス宛書簡 *Epistola ad G. Voetium*』を公刊したが、この両書簡がユトレヒト大学と同大学神学教授ヴォエティウス (Gisbertus Voetius, 1589–1676) に対する名誉毀損にあたるとして、ユトレヒト市参事会に訴えられたのである¹⁾。

前者の書簡は、『省察』の「第七反論」に対する答弁として、『省察』第二版に付録として掲載されたものであるが、そこにはヴォエティウスに対する批判も書き加えられていた。また後者の書簡は、デカルトの「新哲学」を激しく攻撃した文書『デカルト哲学あるいはルネ・デカルトの新哲学の驚くべき方法 *Philosophia Cartesiana sive Admiranda Methodus novae Philosophiae Renati des Cartes*』への反駁として書かれた書簡である。この攻撃文書は、ヴォエティウスの弟子で当時フローニンゲン大学の論理学・自然学の教授だったスホーキウス (Martin Schoockius, 1614–1669) の名で出版されたが、デカルトは『ヴォエティウス宛書簡』において、この文書の全責任をヴォエティウスに帰して彼を批判したのである。

ユトレヒト市参事会は、1643年9月23日(旧暦13日)に、『ディネ師宛書簡』と『ヴォエティウス宛書簡』が、ヴォエティウス自身にとってだけでなく、市と大学にとっても、その名誉を著しく毀損し損害を与えるものであるという判決を下し、刑事訴訟の手続きに入った。しかしこの手続きは、オランダ駐在のフランス大使ド・ラ・テュイルリ (Gaspard Coignet de La Thuillierie, 1597–1653) とオランダ総督オラニエ公 (Frederik Hendrik, 1583–1647) の介入によって停止された。これは、デカルトの友人たちの奔走が功を奏した結果なのだが、訴訟手続きの停止という黒白のつかない結末に、デカルトは満足しなかった。

デカルトは攻撃的をスホーキウスに絞った。誹謗中傷に満ちた『驚くべき

方法』の真の著者が誰なのかをはっきりさせるべく、デカルトはフローニンゲン大学に審理を請求することを計画したのである。そしてそのために、再びド・ラ・テュイルリの力を借りようとして、このフランス大使に宛てた請願書を作成した。ラテン語で書かれたこの請願書は、ユトレヒト紛争全体の内実をデカルト自身が語っている貴重な資料である。本稿では、この請願書を日本語に訳し註解を付すことを試みた。

- 1) ユトレヒト紛争の端緒の概略については、拙稿「ユトレヒト市参事会のデカルト召喚」(『島大言語文化』第34号、1-19ページ)を参照。

〈テキストについて〉

デカルトの書簡の主要なテキストは、

Œuvres de Descartes, publiées par Ch. Adam & P. Tannery, 11 tomes, Paris, 1897-1913, 1964-1974, 1996.(AT と略記)

Descartes Correspondance, publiée par Ch. Adam et G. Milhaud, 8 tomes, Paris, 1936-1963.(AM と略記)

René Descartes, Tutte le lettere 1619-1650, a cura di G. Belgioioso, Milano, 2005, 2009.(B と略記)

の三種の版がある。本稿において使用したテキストはB版(pp.1880-1891)であるが、テキストの異同の確認や註を付す作業のために、他の二つの版も利用した。なお、AM版にはすべての書簡にフランス語訳がついており、B版にはイタリア語訳がついている。訳出にあたってはこれらも参照した。その他に参照した文献は以下の通りである。

A. Baillet, *La vie de Monsieur Descartes*, Paris, 1691, Genève, 1970.

Th. Verbeek éd., *La Querelle d'Utrecht*, Paris, 1988.

E.-J. Bos, *The Correspondence between Descartes and Henricus Regius*, Utrecht, 2002.

Th. Verbeek, E.-J. Bos, J. van de Ven eds., *The Correspondence of René Descartes : 1643*, Utrecht, 2003.

山田弘明他訳『デカルト全書簡集』第一巻 知泉書館 2012年

持田辰郎他訳『デカルト全書簡集』第五巻 知泉書館 2013年

デカルトの請願書

本稿が使用した B 版のテキストは、1645 年のフローニンゲン大学評議会議事録の末尾にある写しに準拠している。AT 版と AM 版も同様である。もう一つ他の写しがライデンにあるが、前者の写しとの間には若干の異同があり、最後の部分が欠落している。こちらの方はフーシェ・ド・カレイユ (Louis Alexandre Foucher de Careil, 1826-1891) によって出版された (*Œuvres inédites de Descartes*, Paris, 1860)。どちらの写しにも日付はない。AT 版は、1644 年 1 月 15 日と 22 日の二通のポロ宛書簡の内容に基づいて、1 月 15 日と 22 日の二つの可能性を示唆している¹⁾。AM 版は日付を 1 月 15-22 日としているが、1 月 22 日のポロ宛書簡に述べられている修正をおそらく採り入れていると推測している。B 版は 1 月 22 日としていて、本訳もそれに従った。

また、この請願書には「ラテン語で書かれたものとフランス語で書かれたものがデカルトの自筆書簡中にある」とバイエが記している (Baillet, II, 250) が、フランス語で書かれたものは見つかっていない。これに関して AT 版は、1 月 15 日のポロ宛書簡で「私は手紙を書きました」と語られている手紙のうちの一通が、ド・ラ・テュイルリ宛にフランス語で書かれた個人的な手紙である可能性を指摘している (AT, IV, 657)。

なお、この請願書のテキストは、B 版、AT 版、AM 版ではそれぞれ、B, 1880-1891、AT, IV, 85-95、AM, VI, 104-121 に収録されているが、いずれも改行は少ない。本訳では、読みやすさを考慮して適宜改行した。また、[] 内は筆者による挿入である。

この上なく高名にして卓越せるお方
ラ・テュイルリの御領主にして
信仰篤きフランス国王の神聖なる御決定による
ベルギウム諸州の大使閣下²⁾へ
レナートゥス・デス・カルテス拝

私はすでに先頃、私が或る人³⁾に抗して書いたものを出版したという理由で告訴されることがないように、あなたの権威による庇護におすがりしました⁴⁾。それゆえに私は今、私が節度のない不公正な人間だと思われるのではないかと恐れております。と申しますのも、他の或る人によって私に抗して書かれたもの⁵⁾のゆえに、その人が告訴されるようにと、私は厚かましくも、再びあなたのお力添えをお願い申し上げているのですから。したがって私

は、両方の訴訟の間にはどれほど大きな違いがあるかを、また両方ともどれほど重大な必要性が、あなたの御援助を請い求めることへと私を促すのかを、ここで手短に御説明申し上げます。どうかそれを煩わしく思われず、御厚情をもってお聞き下さいますよう、伏してお願い申し上げます。

何年も前から私は、ギスベルトゥス・ヴォエティウスとかいう名のユトレヒト市の神学者が、密かな企てや誹謗中傷によって私を攻撃しているのは確かなことだ、と思っておりました。とは申しましても、私が彼に害を加えたことなどまったくなかったのですが。また、彼が次のような人たちの一人だから、つまり、或る人が他の人々から高く称賛されていることを知ると、その人たちにとってはそれだけで十分、その称賛されている人を憎んで責め立てる理由になる、というような人たちの一人だから、ということ以外に、彼の敵意がどこから来るのかも、私には推測できなかったのですが。そして、優れた方々からの御厚意のゆえに、多くのこのような敵意が私に向けられるのですから、ずっと以前から私はそういう敵意には慣れてしまって、最初はそれをあまり気にかけませんでした。しかし、二年ほど前、第一哲学に関する諸省察⁶⁾を公刊した後で、私に分かったことがあります。つまり、ヴォエティウスは、新しい前代未聞の類いの誹謗中傷を私に対して用いて、私が諸省察の中で神の存在を証明したことをまさに理由にして、私がトゥールーズで火刑に処されたヴァニーニ⁷⁾に倣って密かに無神論を教えている、と信じ込ませようとしている、ということが分かったのです。

そして私は、このことに関して何か捏造していると思われなために、彼の手によって書かれた署名入りの手紙を手元に保管しております。この手紙には、先に述べたことがはっきりと書かれております。さらに、彼の根深い悪意と密かな企てが示されている他の手紙も保管しております⁸⁾。

それから間もなく、ユトレヒト大学の名のもとに或る裁決が現れました⁹⁾。その裁決の中で、哲学的な事柄に関する私の見解が、そこからあたかも正統神学に反する馬鹿げたことが帰結するかのようになり、断罪されました。一見したところ、それは無視してよいもののようにも思えたのですが、私は神学者ヴォエティウスの私に対する憎悪を知っていましたし、また、彼がこの裁決の首謀者であると判断いたしましたので、彼に反駁することが私にはどうしても必要だと考えたのです。実際、もし私が黙っていたなら、それを証拠にして、私がこの地で宗教を攪乱する者であると多くの人々に信じ込ませ、かくして私にこの

上ない危険をもたらす、ということほど容易なことはなかったでしょう。また、私が無神論を教えているという話を以前に捏造したあの男が、自分自身でお膳立てしたこの機会を、情熱を傾けて利用するだろうということを、私が疑うはずもありませんでした。

噂というものは、あらゆる真実から、それどころか真実らしいことからさえ、どれほどかけ離れていても、神学者たちによって格別な信仰心を装ってまき散らされると、彼らに対して時宜を得た十分な反論をしなければ、いかに容易に勢いを増していくものかということ、私はよく知っております。古代ローマは世界第一の都市で、そこには、私が知っている数多くのユトレヒトの人々と同様に、誠実で賢明で学識豊かな人が非常に多くいました。それにも拘わらず、かつてローマの扇動家たちは、民衆の面前で長広舌をふるって、この上なく高潔で傑出したあらゆる人々を破滅させました。彼らがどんなやり方でそうしたのかを、私はよく知っております。それゆえ私は、大学のあの裁決に対して、私の見解の潔白を弁護せざるを得なかったのですが、書いたものを公刊する¹⁰⁾ことによってしか、そうすることができませんでした。

実際、私に [他に] 何ができたでしょうか。もしかしたら、市参事に大学の裁決の取り消しを求めるべきだったのでしょうか。しかしながら、文書になってしまったものに関して、市参事が自分の大学の裁決に反対して何事かを決議するなど、私には望むべくもありませんでした。それならば、あなたの御援助を請い願えばよかったのでしょうか。もしそうしたなら、まったく当然のことですが、あなたは私を追い返して軽蔑したことでしょう。実際、自分の家にあるものを外に探し求めるのは、愚かなことです。ですから、他人のペンによって傷つけられた私としては、やはりペンを手にとって、それを使って自分を守ることしかできなかったのです。そしてもちろん、私がこの大学全体に向かってペンを握っても、それは正当なことでした。しかしこの大学には、私なら敵に関してさえ尊重するような尊厳の法というものがあったくない、と私は思っております。それゆえ私は、咎を避けて手を引っ込めました。それなのになぜ、私人によるもの以上の侮辱を大学から被らなければならなかったのか、私には分からないのです。

また、たしかに私はこの大学に対して、それにふさわしい仕方で見事に応戦することもできたでしょう。しかしこの大学は、自らについてそう言っているように、幼くて、今でもなお生まれたばかりの赤ん坊ですので¹¹⁾、私はできる

限り大目に見たのです。ですから私は、私のこの寛大さによって、大学にもその指導者たちにも、軽視できないだけの恩恵を施したと思っております。実際、親というものは、すでに成人した子供よりも、まだ幼い子供の方をいっそう気にかけて慈しむものですから、それと同様に、ほんの数年前にこの大学を創設した人たちにとって、大学は非常に愛しいものであることを、私は疑いません。したがって、大学を不問に付し、またその暴力をも許し、私を傷つけた裁決の首謀者としてのヴォエティウスについてのみ、私は不服を訴えたのですから、彼らは最大の感謝の意を表すべきだったと私は判断しているのです。

しかしながら、もちろん私は、この件に関してヴォエティウスをも侮辱してはおりません。実際、当時ヴォエティウスは大学の総長でしたが、彼が私に敵意を抱いていることを、私はずっと以前から知っておりました。そして今でも、彼が書いた手紙を保管しております¹²⁾。その手紙の中で彼は、自分が裁決の立案者であることを、次のような言葉で自慢しています。「デカルトの新哲学(この哲学は今もなお、物質の力とか微小粒子の原理のうちに潜んでいます)に対して、軽くない打撃が、私たちのこの大学において、ここにあなたが御覧になるような私たちの判断によって、もたらされました」。

そして、この件において私は、あらゆる点できわめて強い自制心をもって振る舞いました。実際私は、ヴォエティウスに関して言うべきことについては、彼によって私が傷つけられたことを知っている人々だけが、それが彼のことを言っているのだとわかるように、また、私の報復が、私が受けた侮辱以上に広い範囲に及ばないように、彼の名も、大学の名も、市の名も挙げませんでした。それどころか、特にこの件に関して文書を作成することさえ、私はまったくしませんでした。ただ、当時私は、イエズス会の或る神父¹³⁾について不服を訴えた手紙¹⁴⁾を印刷に付すのが適当だと思っていましたが、その手紙に、ヴォエティウスに関する僅かなページをついでに差し挟んだだけです¹⁵⁾。

また私は、何も考えずに二つの訴えを一緒にしたわけではありません。それは、二つの訴えで問題になっているのが、宗教ではなく、ただ私的な名誉毀損であることを明らかにするためだったのです。実際私は、ユトレヒトの神学者に対して、イエズス会の神父に対する振る舞いとは別の振る舞いをしたのではありません。しかも、前者については、後者についてよりもはるかに僅かなことしか書かなかったのです。

しかしながら、私の聞き及ぶところでは、私が書いた僅かなことは、ヴォエ

ティウスにとってまったく好ましからぬものでした。彼の怒り、彼の脅迫、また、彼が私に対して或る恐るべき書物によって企てていると言われていた報復の非道さ、これらについては申し上げるまでもありません。ともかく、一年後について二冊の本が現れました。これら二冊の本は、同時にユトレヒトで出版され、同じ印刷業者のもとで同じ活字を用いて同じ判型で印刷されており、題名も似たような語尾で終わっています¹⁶⁾。一冊は、ヴォエティウスの名を掲げた『聖母マリア友愛会について』という本で、彼は同じ宗派の一人に反対してこの本を書いたのです¹⁷⁾。もう一冊は、フローニンゲン大学¹⁸⁾の哲学教授でヴォエティウスの弟子マルティヌス・スホーキウスの名を掲げた『デカルト哲学について』です。

スホーキウスは、哲学に関する私の見解を反駁するように見せかけて、しかしそれには触れずに、絞首刑や車刑や火刑でしか償えないのを常とするような犯罪で私が汚れていると信じ込ませることに、彼のきわめて長い著作全体を向けたのです。そして彼は、私があたかもトゥールーズで火刑に処せられたヴァニーニに代わるもう一人のヴァニーニであるかのように、狡猾にまったく密かに無神論を教えていると、以前ヴォエティウスがまさにこのようなことを述べたときの言葉とほとんど同じ言葉で、はっきり断言したのです。そしてその同じ箇所では、名誉毀損の訴訟とか、裁判官や死刑執行人をもちだして、私を脅したのです。それはつまり、彼が言うには、私がおこがましくも彼の師に反抗して口を開いたからであり、また、彼の師が私に対して放った矢を私がまったく身をもって受け止めなかったからなのです。挙げ句の果てに彼は、私をよそ者呼ばわりするだけでなく、神の言葉を忘れて、私のことをカインだ、放浪者だと呼んで、誰でも処罰されることなく私を殺すことができると信じ込ませたがっているように見えました。

それでも私は、この誹謗中傷の荒唐無稽さを考えてみて、初めのうちはたしかに、このスホーキウスという名前は偽名ではないだろうか、フローニンゲンにこの名前の教授が誰がいるのだろうか、と疑いました。実際、いかなる行為によっても言葉によっても、私がけっして傷つけたことなどない人、生まれていることさえ私が以前には知らなかった人、そのような人が、その本の中でこれほど無礼に私を罵倒し、この上なく非道で弁解の余地なく罰せられねばならない誣告によって、おこがましくも私を傷つけているということに、私は驚いてばかりではいられなかったのです。その同じ本の中で彼は、私が正当にある

がままに書いた僅かなことを理由にして、裁判になる恐れがあると言って私を脅したのです。それはあたかも、彼がベルギウムの独裁者で、どんなことでも、それは彼にさえ許されないほど不正なことではなく、また、どんなことでも、それがきわめて重大な犯罪だと見なされて有罪判決を下されることを、彼以外の方が心配しなくてもよいほど正しいことではない、というふうに、彼がすべての裁判を統括しているかのようでした。

しかし私は、彼がその文章の至るところでヴォエティウスの代理人として振る舞っていることに気づきましたので、もし彼が私によって告発されたなら、彼は直ちに次のように弁明するだろうと考えました。彼は私に敵意をもっておらず、私のことをたまたま知っていたわけでもないので、何一つ自ら進んで私に敵対して書いたのではなく、ただヴォエティウスの命令によって書いただけなのだ、と。

このようなわけで、代理人がしでかしたことでその依頼主を告発するのは、きわめて公正なことだと私は判断いたしましたので、スホーキウスについては触れずに放っておいて、私の訴えをヴォエティウスに向けました。そして私は、印刷に付したある手紙¹⁹⁾の中で、ヴォエティウス自身のために同時に出版された二冊の本²⁰⁾について、私の判断を率直かつ正直に述べました。というよりはむしろ、彼の代理人の脅迫、つまり、間違いなく彼は私を法廷に召喚しようとしている、という脅迫を忘れずに、あたかも裁判官の面前で私の立場を弁護するかのよう、私はその手紙の中で、読者の面前で私の立場を弁護したのです。そして私は、双方の言い分に耳を傾ける正式な裁判においてもまったく容易に立証できるような言葉でなければ、どんな些細な言葉でもけっして口に出さないように、最大の注意を払いました。したがって、ユトレヒトで私に対してなされたと言われていることは、私のどんな期待からも懸け離れていて、私は今でも、それはほとんど信じ難いことだと思っているほどなのです。

しかしそれにもかかわらず、ユトレヒトでは、通常、敵や逃亡者に対してだけ用いられ、賓客や友人に対しては用いられないような何か或る法律が、私に対して引き合いに出されると聞きましたので、少なくとも、私が故国を追放された者ではないことをユトレヒトの人たちに知ってもらい、彼らが私に対して企てていることが、あなたのお執り成しによって取り止めになるように、あなたのもとに庇護を求めることしか、私にはできませんでした。そして、あなたが御厚情をお示し下さり、私が懇願いたしましたことをお授け下さるとい

意向をおもいだったということは、私にはよく分かっております。あなたがその御厚情と御意向で私に施して下さいた御恩義は、あなたはその権威によってはるかに大きな御援助を私にお与え下さったとしても、それに劣らぬほどのものです。

しかし実は、あなたに御助力を乞うのが遅すぎました。ユトレヒトではすべてのことが秘密裡に運ばれて、知らないうちに私は、すでに有罪判決を下されていたのです²¹⁾。しかも、友人たちのいかなる尽力をもってしても、その時まではまだ、その有罪判決の内容がいったいどんなものなのか、私には知ることができませんでした。ともかく、私が知っているのはただ、有罪判決が下されたということだけなのです。

そして私は、どんな過ちも犯していないと自覚しております。それどころか、私が書いた文書がユトレヒトで有罪判決が下されたと言われていますが、まさにそれら文書によって私は、すべての善良な人々に、そしてとりわけユトレヒト市に、申し分なく貢献したと思っております。ですから私は、あの市によってすでになされたことよりもっと邪悪なことを恐れるべきだったのではないかと、などと推測することが、正当なことだとは思いません。したがって、今のところ私が得たのはせいぜい次のことだけのように思われるのです。つまり、私は、有罪判決を下されたから有害であると敵たちに言われているだけでなく、その有罪判決から推定されうるよりもはるかにずっと有害であると言われている、ということです。と申しますのも、敵たちは、あなたのお執り成しによって私に恩赦が施される²²⁾ということがなかったならば、他にもっと多くのいっそう厳しい判決が後に続いただろう、と言い触らしているからです。

ところで、先の有罪判決の根拠は一つしかなかった、と私は聞いております。そしてそのことを、ヴォエティウスのために彼の友人たちが断言したので（というのは、ヴォエティウス自身は、温和で敬虔な人として、この件に介入しなかったのです）、私に有罪判決が下されたのです。つまり、私は申し上げますが、ヴォエティウスは私に敵対するようなことを決して何もしなかったということが強調され、また、ヴォエティウスは誠実な人だと言っている人たちの証言が提出されましたので、私が書いたものの中に、彼は誠実ではないと明言しているような箇所があるかどうかということ以外には、何も審理されなかったのです。そして、そのような箇所がたくさん簡単に見つかりましたので、彼らの判断によれば誠実な、あの男の名誉を毀損した文書の作者として、私に

有罪判決が下ったのです。

しかし、この厄災すべての主犯はスホーキウスでした。それは彼が、そのきわめて不躰な本によって、ヴォエティウスに不服を訴える原因を私に与えたから、というだけではありません。それはとりわけ、その後彼が、その夏の大部分の間ユトレヒトに留まって、そこで公然と自慢話をまき散らし、口汚い非難に満ちた彼の本は彼一人によって書かれたもので、ヴォエティウスは手伝ってもいないし知ってもいないということ、あらゆるやり方で信じ込ませようとしたからなのです。

このようにスホーキウスは、まったく弁解の余地のない行いの全責任を自分自身に負わせ、しかも自分が攻撃したのだと明言することを恐れなかったのです。それは、ずっと軽微で弁解の余地もあるにしても、似たようなことを私がやったように見せかけて、言い換えれば、ヴォエティウスこそが攻撃の機会を私に与えたにも拘わらず、私が最初にヴォエティウスを攻撃したのだと見せかけて、何らかの口実で裁判官が私に有罪判決を下せるように仕組むためだったのです。その際スホーキウスは、こんなふう、無論もっと公正な仕方によってですが、自分にも有罪判決が下されるべきだと立証されるかもしれない、ということなど気にかけなかったのです。それどころか、私の聞くところでは、彼は目下、わたしに敵対する本をさらにもう一冊印刷させて²³⁾、それによって、彼のヴォエティウスを、すでに私的に裁判官たちのところで弁護したように、公にすべての人々の前でも弁護して、以前の文書の全責任を自分が引き受けるつもりの方です。

もし、こうしたことすべてを私が黙って見過ごすとか、あるいはそれに対してただ文書で反駁するだけにしたならば、私は敵たちに、スホーキウスが私について書いたことはユトレヒトの有罪判決によって確証されたと断言する絶好の機会を与えることになるでしょう。実際、あの市の裁判官たちは、彼らのもとで出版され、あらゆる種類の誹謗に満ち溢れている本を、咎めようとはしなかったのですが、それは、その同じ本に対する私の控えめな応答を審理し有罪判決を下すことに、彼らがあれほどの熱心さと厳格さを示した、まさにその時だったのです。このようなことは、彼らが、その本に含まれている事柄を真であると想定して、少なくとも暗黙のうちに是認した、というのでない限りは、ほとんど信じ難いことです。また私はすでに、ヴォエティウスの取り巻きたちが、あちこちで次のように言い触らしていると聞いております。彼らが言うに

は、スホーキウスが私について書いたことは真実で、私がヴォエティウスについて書いたことは虚偽である、ということは十分明らかなのです。なぜなら、私は、ヴォエティウスに対して私の立場を弁護するためにユトレヒトに向向くこともなかったし、名誉毀損の訴訟を起こすためにフローニンゲンに行くこともなかったのだから、というわけです²⁴⁾。

さらに彼らは付け加えて、あなたのお執り成しによって私に許し与えられたのは、いかなる平和でもなく、ただ東の間の偽りの休戦でしかないのであって、新たな戦争が、そして前回よりも恐るべき裁判の危険が、再び私に差し迫っている、と言っています。そこで次に彼らは、私を押しつぶすために、スホーキウスの本を確実に疑う余地のない証言として利用するつもりであるように見えます。そして、彼らの残忍さがこれほどまでに高じておりますので、私としては、スホーキウスのあの本に関してこうしてあなたのもとに訴え出て、あなたの権威のお力添えをいただき、彼の審理を委ねられた裁判官たちによって、彼の本が中傷と虚偽に満ちたものであると宣告され、さらに、事実を偽り、私を侮辱して書かれた事柄をスホーキウス自身に撤回させ、その取り消しの言葉を公表させるようにしてもらわない限り、私の評判だけでなく生命の安全についてさえも、十分に対処できないほどなのです。これは確かにまったく正当なことですし、スホーキウスが現在住んでいるフローニンゲン州²⁵⁾は、きわめて卓越した高潔な方々によって治められている、と私は理解しておりますので、あなたから彼らへのお口添えによって私を助けて下さることを、あなたが拒まれることさえなければ、彼らは、私が求め公正が命じることすべてを認める判決を下す、と私は確信しております。

しかも、訴訟は難しいことにはならないでしょう。実際、スホーキウスの序文の23ページと、その本の最後から二番目の章を読めば、彼らはそこに、「私が、きわめて狡猾にそして密かに、無神論を教えている」とはっきり断言されているのを見るでしょう。そして次に、彼らがその本の残りの部分にもざっと目を通せば、その本にぎっしり詰まった無数の卑劣極まる誹謗と偽りだらけの非難を見つけるでしょう。さらにそれに加えて、私には<……>²⁶⁾弟子たちがいることにされて、また、何やら不合理でおぞましく異常な規則も私のせいにされて、あたかも私が、これらの規則を弟子たちに定め、こうして、まったく何の役にも立たず、法によって罰せられなければならないような、新しい一派を設立したかのようにされていることも、彼らは見出すことでしょう。

しかし、もし彼らがスホーキウスを審理して、そのような規則をいったいどんな書板²⁷⁾の中に彼は見つけたのか、私はその規則を定めている弟子たちとは誰なのか、私とその弟子たちに無神論を教えているということ、どんな論拠あるいは証拠によって彼は立証できるのか、そして最後に、いったいどんな侮辱を私はかつて彼に加えたのか、あるいは、彼があれほど無礼に罵って書くだけのどんな理由を私は彼に与えたのか、とスホーキウスに尋ねたならば、彼には正当化の口実が一切ないだろうということ、私は疑いません。

この上なく高名にして卓越せるお方に、王国の最も重要なお務めに日々忙殺されておられるあなたに、ごく小さな取るに足らぬ私事で御迷惑をおかけするのは、もちろん厚かましく畏れ多いことです。しかしながら、すでにユトレヒトで行われた出来事によって、私の訴訟事件は非常によく知られ、ほとんど公になっておりますので、私の祖国フランスの名誉、それはあなたがこの地でとりわけ御配慮されておられるものですが、その名誉のために、少なからず重要だと思われることを申し上げます。

すなわち、私を咎めるあの忌まわしい非難がもし真実ならば、私は許されるべきではありません。私もまた、いかなる赦免も恩顧もまったく望みません。しかしもし、その非難が虚偽であるならば、そして、それがこの上ない偽りであることは確かなのですが、そうであるならば、現地の人々と同等の権利を享受することを期待して私がすでに十五年間暮らしてきたこの地方において、よそ者だからという口実で、あらゆる種類のこの上なく非道な誣告を私に向かって投げつけ集め、それから、それらの誣告を利用して、裁判の危険があると言って私を脅すことが、他の人々には罰せられることもなく許され、その一方で私は、正当かつ真なる理由によって自分を守るためにあえて口を開けば、それだけで、直ちに誣告者として有罪判決を下される、このようなことをなくすことが重要なのだと私は考えているのです。

さらに申し上げれば、これまでもあなたは、私が以前に嘆願いたしました折に、類くない御厚情によって私を迎え入れて下さいました。その御厚情ゆえに、あらゆる熱意と恭順の念をもってあなたを尊敬申し上げる心づもりが私には十分できておりますので、あなたから賜る御恩誼に報いる義務に、私は苦もなく耐えることでしょう。と申しますのも、私には、あなたにすべてを負うことに何のためらいもないのですから。

- 1) 1644年1月15日付のポロ宛書簡に以下のような一節がある。

私は手紙を書きました。あなたにこれらの手紙をお送りしますが、もしこれらの手紙に何か欠けているものや、書き変えなければならないものがあれば、そのことをお知らせいただければありがたく存じます。そのため、手紙には封をせずにお送りいたします。
ラテン語の長い手紙は、今の私に役立つだけでなく、私が弁明しなければならなくなった場合に、その弁明の一部になるものでもあります。(B, 1878; AT, IV, 80; AM, VI, 102)

ポロ (Alphonse Pollot, 1602-1668) は、ハーグの宮廷に仕えていたイタリア出身の貴族で、デカルトの友人である。なお、下線は筆者によるもので、括弧内の各版に付したアラビア数字は、それぞれの版の該当ページである (以下同様)。

また、1644年1月22日付のポロ宛書簡には以下のような一節がある。

ブラッセ氏の御苦勞と、私の手紙が大学評議会に宛てられるのが適当だというアルドリ
ンガ氏の御判断を、御親切にもお知らせ下さいましてありがとうございます。そのこと
に関しまして、もう一度あなたに請願の一筆をお送りいたします。そこに私は、州議会
にも大学評議会にも報告できないようなことは何一つ書きませんでした。なお、あなた
と両氏の御判断によって適切な表題を書き加えていただけるように、請願書に表題は書
き入れませんでした。(B, 1890; AT, IV, 82; AM, VI, 122)

この書簡から推測されるように、デカルトの請願書の表題は、おそらくポロが書き入れたと思わ
れる。なお、アルドリंगा (Wigbolt Aldringa) は1640年から1645年までフローニンゲン州の
連邦議会議員。ブラッセ (Henri Brasset, 1591-?) はフランス大使ド・ラ・テュイルリの秘書
官。

AT版は、デカルトの請願書のテキストに付した序言の中で、以上二通の書簡に基づいて、こ
の請願書の日付について次のように推測している。

この請願書が、1644年1月15日付のポロ宛書簡で言われている「ラテン語の長い手紙」
で、デカルトがド・ラ・テュイルリに宛てて書いた最初の手紙であるならば、日付は
1644年1月15日となるだろう。あるいは、この請願書が、ポロの求めに応じて修正さ
れた「請願の一筆」で、1644年1月22日付のポロ宛書簡とともにポロに送られたもの
であるならば、日付は1644年1月22日となるだろう。こちらの方の可能性が高いよう
に思われる。この第二の請願書がフローニンゲンに提出されたのであって、最初に書か
れた請願書は不完全だと判断されて、保存されなかったのではないか。(AT, IV, 84-85)
しかし他方、日付に関する補遺においては、上述の推測を修正して次のように述べている。

この嘆願書が、1644年1月15日にポロに送られた「ラテン語の長い手紙」であって、

1月22日に送られた「請願の一筆」ではない、ということもありうる。表題のない「請願の一筆」は、ほんの短い手紙で、ただ形式に関するものだったに違いない。また、もしこの「請願の一筆」が実際に、フランス大使の手紙とともにフローニンゲンの大学評議会ないし州議会に届けられたのだとしても、それを「ラテン語の長い手紙」に加えて蔵書にするほどの意義が認められなかったため、この「請願の一筆」は保管されなかったのだろう。(AT, IV, 657)

- 2) 「ベルギウム **Belgium**」という地名は、広くはライン川とセーナ川間の低地地方を指し、現在のベネルクス三国を含む地名である。ド・ラ・テュイルリは、この請願書に彼自身の手紙(後掲)を添えて、フローニンゲン州議会に送付することになる。
- 3) ヴォエティウスのこと。
- 4) ユトレヒトの訴訟事件におけるド・ラ・テュイルリの「庇護」に関して、デカルトは1643年11月後半のポロ宛書簡の中で、次のように語っている。

大使閣下が私の訴訟事件を真剣に引き受けると明言して下さいましたし、また大公殿下も自ら私のためにこの件についてお手紙を書かせて論じて下さいましたので、何も恐る必要はないように私には思われます。(B, 1850 ; AT, IV, 51 ; AM, VI, 65)
- 5) スホーキウスの『驚くべき方法』のこと。
- 6) 『省察 *Meditationes de Prima Philosophia*』のこと。第一版は1641年8月にパリで、第二版は1642年5月にアムステルダムで、それぞれ出版された。
- 7) ヴァニニー (*Lucilio Vanini*, 1584/5–1619) はイタリアの哲学者。無神論者・魔術師として断罪され、トゥールーズで火刑に処せられた。
- 8) おそらくヴォエティウスがメルセンヌ宛に書いた手紙。ミニモ会修道士のメルセンヌ (*Marin Mersenne*, 1588–1648) は、科学を含めた諸学問に深い関心を持ち、アカデミーを開いてヨーロッパ中の学者と広く交流した人物で、デカルトが最も信頼を置いた友人である。しかしヴォエティウスは当初、メルセンヌを正統教義の擁護者でデカルトの敵対者だと見なしていたので、デカルトとの抗争に自分の味方としてメルセンヌを引き込むために、彼に五通の手紙を書いている。デカルトはそれらをメルセンヌから受け取り、『驚くべき方法』の作成にヴォエティウスが関与したことの証拠として保管した。それらの手紙は失われたが、その一部が『ユトレヒト市参事会宛弁明書簡 *Lettre apologétique aux Magistrats de la Ville d'Utrecht*』に引用されている (AT, VIII–2, 205–206)。
- 9) 1642年3月27日(旧暦17日)に発令されたユトレヒト大学の裁決 (AT, III, 551–553 に採録) のこと。大学評議会はこの裁決によって、レギウスが同僚を直接攻撃するやり方と伝統的哲学を取り扱う際のやり方を非難するとともに、デカルト哲学の否認とその講義の禁止を大学として公式

に決定した。その理由は、デカルトの「新哲学」が、大部分のヨーロッパの大学で標準的に教えられている哲学に反しており、学生たちが自分たちの学問分野の文献を理解することも論じることもできなくさせているからであり、それだけでなく、その「新哲学」からさまざまな不条理な見解が出てくるし、未経験な学生たちによってそういう見解が導き出されることがありうるから、というものだった。

評議会の裁決文は1643年10月刊行の『ユトレヒト大学の証言 *Testimonium Academiae Ultrajectinae*』の中で公表されたが、デカルトは1642年3月末には、レギウスからこの裁決の内容を知らされている。デカルトはこの裁決文を『ディネ師宛書簡』に載せ (AT.VII, 592-593)、この裁決は、ヴォエティウスが総長という立場を悪用して、自分の個人的利益のためにでっち上げたものだと非難した。その裁決の様子については、バイエが次のように伝えている。

ヴォエティウスは同月 [1642年3月] 17日から集会を招集した。そしてあらゆる裁判の形式に反して、そこに大学全体の名において下されたかのようにみえる裁決文を持ち込んだ。しかし、それは彼が一人で作成したものであり、総長名で宣告されたものであった。(Baillet, II, 155)

なおこの箇所の訳は、デカルト全書簡集第五巻147ページの訳に若干手を加えたものである。

- 10) 『ディネ師宛書簡』を公刊したこと。
- 11) ユトレヒト大学の創設は1636年。
- 12) 前註8)を参照。
- 13) ブルダン (Pierre Burdin, 1595-1653) 神父のこと。イエズス会士で、『省察』に対して「第七反論」を書いた。
- 14) 『ディネ師宛書簡』のこと。
- 15) 『ディネ師宛書簡』に「差し挟んだ」ヴォエティウス批判について、デカルトは1643年11月7日付のウィレム宛書簡で次のように説明している。

彼らはその『証言』の中で、ただ三つの点において私を非難しています。第一には、「レギウス氏の同僚のうちの或る者たちは、自分たちよりレギウス氏が高く評価されているので、明らかに彼を妬んでいる」と、私を書いたことです (『ディネ師宛書簡』 AT.VII, 583)。これはヴォエティウスとは関係のないことです。そして、或る者が他の或る者を妬んでいると言ったからといって、それは犯罪ではありません。しかも、彼らはそのことを否定するかもしれませんが、彼らの行動がそれを立証しているのです。

第二は、彼らが「卑劣な推測」(『ユトレヒト大学の証言』p. 4)と呼んでいるものです。それは、私が「地団駄を踏む大騒ぎ」について述べた際に、「その大騒ぎが神学者によって友人たちを介して引き起こされたとは、私は言いません。実際それは私には分からない

いからです。しかし、以前にはそんな大騒ぎは起こっていませんでした」と言ったからです（『ディネ師宛書簡』AT.VII, 585）。これも、名誉毀損の訴えを根拠づけるに十分だとは、私には思えません。

そして最後は、彼らが「明白な誹謗中傷」と呼んでいるものです。これは、私がヴォエティウスを「すぐに嘯みついて騒ぎを起こしたがる指導者」と呼んで、彼らが下した裁決の首謀者はヴォエティウスだと言ったことを指しています（『ディネ師宛書簡』AT.VII, 590）。そして彼らはみな、そういう騒ぎの共犯者になりたいのです。その点において彼らは、私が彼らに与えたよりも大きな損害を、彼ら自身に与えているのです。そして私は、こうしたことに関しても、罪を犯しているとは思いません。反対に、彼らが名誉を重んじる心をもっているなら、これについて私に感謝すべきでしょう。（B, 18530; AT. IV, 34–35; AM. VI, 48–49）

ウィレム（David le Leu de Wilhem, 1588–1658）はオラニエ公の国家顧問で、芸術や科学のパトロンとしても知られた。なお、『ディネ師宛書簡』のAT版における該当ページを示した（ ）内は、筆者による挿入である。

- 16) 後述の『聖母マリア友愛会について』*De Confraternitate Mariana* と『デカルト哲学について』*De Philosophia Cartesiana* のことで、*Mariana* と *Cartesiana* の語尾の類似を指摘している。なお、前者の出版は1643年3月で、『改革派の人々の間にある聖母マリア友愛会という団体のために最近書かれた論文から抜粋された、曖昧で不確かでありながら危険でもある諸言明の見本 (Specimen)、この見本は、ベルギーの諸教会とその牧師たちおよび長老たちがこれを評価すべく、ギスベルトゥス・ヴォエティウスによって提供される』が正式な表題。また後者は『驚くべき方法』のことである。
- 17) デカルトは『ヴォエティウス宛書簡』の中で、彼とヴォエティウスとの間の論争を、スヘルトーヘンボスの聖母マリア友愛会に関するヴォエティウスとデマレ (Samuel Desmarets, 1599–1673) の間の論争に関連づけようとした。スヘルトーヘンボスではカトリック勢力が強く、両信徒からなる聖母マリア友愛会が設立されていた。デマレは1642年までこの地の牧師で、彼がカトリックの聖母マリア友愛会へのプロテスタント信者の入会を禁じなかったことに対して、ヴォエティウスはそれを間接的偶像崇拜だと非難した。
- 18) 「フローニンゲン大学」の原語は *Academia Groningo-Omlandica*。AM版のフランス語訳は *Académie de Groningue et de Hollande*、B版のイタリア語訳は *università olandese di Groninga* であり、いずれも *Groningo-Omlandica* の *Omlandica* を「ホルランドの」という意味に解している。しかし本訳では、以下の本文においても一度用いられている *Groningo-Omlandica* という表現に付されたB版の註に従って、「フローニンゲン大学」と訳出した。後註25)を参照。

- 19) 『ヴォエティウス宛書簡』のこと。
- 20) 上述の『聖母マリア友愛会について』と『デカルト哲学について』のこと。『ヴォエティウス宛書簡』(AT.VIII-2, 1-194)の正式な表題は、『この上なく著名なる士、ギスベルトゥス・ヴォエティウス博士へ宛てられたルネ・デカルトの書簡。そこにおいて、ユトレヒトの人ヴォエティウスによって最近同時に出版された二つの書が吟味される。一つは聖母マリア友愛会について、他の一つはデカルト哲学についてである』というもの。
- 21) デカルトは、1643年9月23日(旧暦13日)の判決で有罪を宣告されたが、その様子についてバイエは次のように伝えている。
- 彼の敵たちが市参事たちから手に入れた判決は市庁舎で読み上げられたのだが、他の文書が読み上げられた後の通常の時間に、しかも、これをデカルト氏に知らせることができると思われる人はいないと分かってから、読み上げられたのだった。(Baillet, II, 194)
- なお、オランダ語の判決文は、AT.IV, 20-23 および Verbeek, 228-231 に収録されている。また、AT. IV, 650-652 および AM. VI, 31-33 にはそのフランス語訳がある。
- 22) ド・ラ・テュイユリとオラニエ公の介入によって、デカルトに対する刑事訴訟の手続きの停止が、1643年11月16日(旧暦6日)のユトレヒト市参事会の決議で承認された。
- 23) この文書の印刷も、1643年11月16日(旧暦6日)のユトレヒト市参事会の決議で止められた。
- 24) ライデンのテキストはここまでで、以下最後まで欠けている。
- 25) 「フローニンゲン州」の原語は *Provincia Groningo-Omlandica* で、AM版のフランス語訳は *Province de Groningue et de Hollande*、B版のイタリア語訳は *provincia di Groninga* と訳している。B版がこの箇所付した註によれば、*Groningo-Omlandica* の *Omlandica* はオランダ語で「都市周辺地域」を意味する *ommelanden* のラテン語表現で、フローニンゲン市だけでなくその周辺地域全体をも指すことを強調するために用いられた表現である。ただし、本文中に既出の *Academia Groningo-Omlandica* に関しては、そのような註は付されていない。前註18)を参照。
- 26) AT版、AM版、B版のいずれも、語の欠落を指摘している。
- 27) モーセが受け取った律法の石板を示唆している(旧約聖書「出エジプト記」第31章第18節)。

ド・ラ・テュイユリの要請書

ド・ラ・テュイユリは、デカルトの請願書に自筆の要請書を添えて、フローニンゲン州議会に送付した。デカルトの請願書と同様にこの手紙の写しも、1645年の大学評議会議事録の最後に、付属文書として収録されている。ド・ラ・テュイユリの手紙にも日付はないが、バイエに従えば、その手紙が書かれたのは1644年3月である¹⁾。

なお、この要請書のテキストは、AT版のAT. IV, 96とAM版のAM. VI, 121に収録されている。どちらの版にも改行はないが、本訳では適宜改行した。

拝啓

デカルト氏の徳はよく知られておりますので、それについてあなた方にお話しするのは無用でしょう。また、彼のように才能ある人物を独占することは、こちらの諸州にとって非常に貴重なことなものですから、彼の才能についても、あなた方が御存知のこと以上のことを、私が語ることはできないでしょう。

このような次第ですから、私が彼を擁護し、彼が被った損害について彼のために裁判を請求することに、皆様方は驚かれないでしょう。彼の出自と私の職務のゆえに、私はそうせずにはいられないのです。しかも彼は、彼が私に提出した請願書であなた方もお分かりのように、彼の正しさを認めて下さるようあなた方をお願いすることを、私に強く求めているのです。あなた方はそうなさるべきです。なぜなら、彼はまったく正しいのですし、一般の人々も、彼がいつそう安心して彼らのために仕事ができるように、彼の精神を自由しておくのが望ましいと思っているからです。

それゆえに私は、デカルト氏の安らぎのためにあなた方にお出来になることすべてをなさって下さるよう、また、あなた方が不満を訴える人々の要求に応えるために用いておられる公正さを、デカルト氏に満足を与えるために通例通りお役立て下さいますよう、お願い申し上げます。

私といたしましては、皆様方にどうか信じていただきたいのですが、それについての私の感謝の気持ちを表すことができる折には、喜んで心からお示するつもりであります。また、あなた方に確言いたしますが、私は本当に…²⁾。

1) バイエは、ド・ラ・テュイルリの手紙について、以下のように伝えている。

デカルト氏は請願書の形でラテン語の手紙を書いて、ハーグのフランス大使ド・ラ・テュイルリ氏に再び願い出た。その手紙で彼は、自分の身に起こったこと全貌をド・ラ・テュイルリ氏に述べた。ド・ラ・テュイルリ氏は、1644年の3月までにはもう、州議會を掌握しているフローニンゲンの人々に推薦の手紙を書いて、彼らがこの訴訟事件に心を配り、裁判官たちの無能と偏見によって正当な権利が減ぼされること——これはド・ラ・テュイルリ氏の介入がなければユトレヒトで起こりえたことなのだが——にならないように、と要請した。(Baillet. II, 250)

- 2) テキストでは etc となっている。おそらく「あなたの忠実な下僕であります」というような常套句が述べられていたのだと思われる。

フローニンゲン大学の審理はすぐには開始されなかった。スホーキウスが当時フローニンゲン大学の総長であった¹⁾ことが最大の理由だったと思われるが、ド・ラ・テュイルリがオランダを離れた²⁾ことも影響したのかもしれない。さらに、デカルト自身、父親の遺産相続に関する問題の整理を主たる目的として、フランスに帰省した³⁾ために、審理の開始を促す手立てを講じることができなかった。

フランスから戻ったデカルトは、1645年2月17日付でフローニンゲン大学に審理督促の手紙⁴⁾を出した。これが受理され、審理は4月に開始された。この審理においてスホーキウスは、『驚くべき方法』がもっぱら彼自身によるものではなく、ヴォエティウスの手が加えられたものであることを証言した。

デカルトの名誉回復を告げる4月10日(旧暦)付のフローニンゲン大学評議会の裁決文は、大学評議会秘書官マチアス・パソル(Matthias Pasor, 1599–1658)によって、自筆の添え状とともにデカルトに届けられた⁵⁾。その一ヶ月後、デカルトはパソル宛に礼状を書いている。最後にこの礼状を訳出して、本稿を閉じることにしたい。

- 1) スホーキウスは1643年8月26日(旧暦16日)にフローニンゲン大学の総長に選ばれ、その任期は1644年8月26日(旧暦16日)まで続くことになる。
- 2) ド・ラ・テュイルリは、当時交戦中のスウェーデンとデンマーク(1643–1645年のスウェーデン・デンマーク戦争)に対して、フランスによる調停を行うために、1644年2月27日に特使に任命され、4月中旬にハーグを発った。彼の不在は二年続いた。
- 3) デカルトは1644年5月にフランス旅行に出発し、同年11月に戻ることになる。
- 4) この手紙は、B, 1974–1977; AT. IV, 177–179; AM. VI, 204–207に収録されている。
- 5) パソルの添え状および評議会の裁決文については、デカルトの手による写しがある(B, 1994–2003; AT. IV, 793–801)。

デカルトの礼状

この書簡は、*Archiv für Geschichte der Philosophie*, 92, issue 3, 2010, pp. 299–303 に収録されているもので、B版、AT版、AM版のいずれにも収録されていない新発見の書簡である。このテキストにも改行はないが、本訳では適宜改行した。

拝啓

高名な貴大学のこの上なく威厳ある評議会による御裁決を、フローニンゲン4月16日¹⁾付であなたが私にお書き下さったお手紙とともに私が受領いたしましたのは、ようやく昨日のことでした²⁾。それゆえ、私があなた方にどれほど大きな恩義をこうむっていると評価しているのかを、もっと早くお知らせすることができませんでした。

あなた方の公正への愛が、大きな力をもっていたのです。ですから、あなた方の同僚の一人を相手にしたどれほど厄介な問題が私にあったにしろ、あなた方はみな、互いに強く心を結びつけ、思いやりにあふれておられます。一方私はいえ、[あなた方に]ほとんど知られておらず、貴大学のどなたかとかつて親しくお話したという記憶もないほどです³⁾。それにもかかわらずあなた方は、決着をつけるために私が不服を訴えた事柄に対して、きわめて寛大であろうとなされ、私のためにお心配りさえして下さいました。そして私は、それで十分満足しましたと申し上げるだけのものを、あなた方から手に入れました。実際、私は、憎しみによって誰かを追い回したり罰することを求めたりはしません。私はただ、評判をそのまま傷つけられないように保つこと、また、幾人かの人々が誣告や偽証によって私をそこに投げ込もうと企てる危険を避けること、それだけを切に望んでいるのです。

私はできるだけ早い機会に、信仰篤きフランス国王の大使ド・ラ・テュイリ閣下に、このことをお知らせするつもりです⁴⁾。大使閣下のあなた方へのお薦めがどれほど私の役に立ったかを、知っていただくためです。

そして最後に、命ある限り私は、この件をあなた方からいただいた大きな恩恵として記憶に留め、私が以下の者であることを公言するでしょう、と申し上げます。

すべてにおいて従順なることをこの上なく心掛ける、あなた方の下僕
敬具

デカルト

エフモントにて 1645年5月26日⁵⁾

- 1) この日付は旧暦。新暦ならば4月26日。
- 2) デカルトは評議会の裁決が下されたことを知らずに、1645年5月5日のトビアス・アンドレアエ宛の手紙 (B, 2004–2007; AT. IV, 195–196; AM. VI, 222–223) で、彼に最新の情報を尋ねている。その後、この礼状と同じ日付の手紙 (B, 2016–20191; AT. IV, 214–215; AM. VI, 233–234) で、彼に感謝の意を表し、スホーキウスとの和解を提案している。なお、トビアス・アンドレアエ (Tobias Andreae, 1604–1676) はフローニンゲン大学の歴史・ギリシア語教授で、デカルト哲学に理解を示し、デカルトとスホーキウスの抗争の際にはデカルトを支持した。
- 3) バイエによれば、デカルトはトビアス・アンドレアエと一度会っている。

デカルト氏は、彼の訴訟相手のスホーキウスと、スホーキウスのために請願人になったヴォエティウスが、彼のフランス旅行の間何もしていないわけではなく、彼の不在を利用しようとするだろうと判断して、5月27日、トビアス・アンドレアエ氏という名のフローニンゲン大学の教授に手紙を書いた。デカルト氏は、彼に生涯でただ一度しか会わなかったが、彼には進んでデカルト氏に力を貸そうという十分な好意があることに気づいていた。 (Baillet. II, 250–251)
- 4) ド・ラ・テュイルリは、1644年4月にオランダを離れ、1646年になるまで戻らない。デカルトは彼に宛てて手紙を書いたかもしれないが、見つかっていない。
- 5) この日付は新暦。旧暦ならば5月16日。